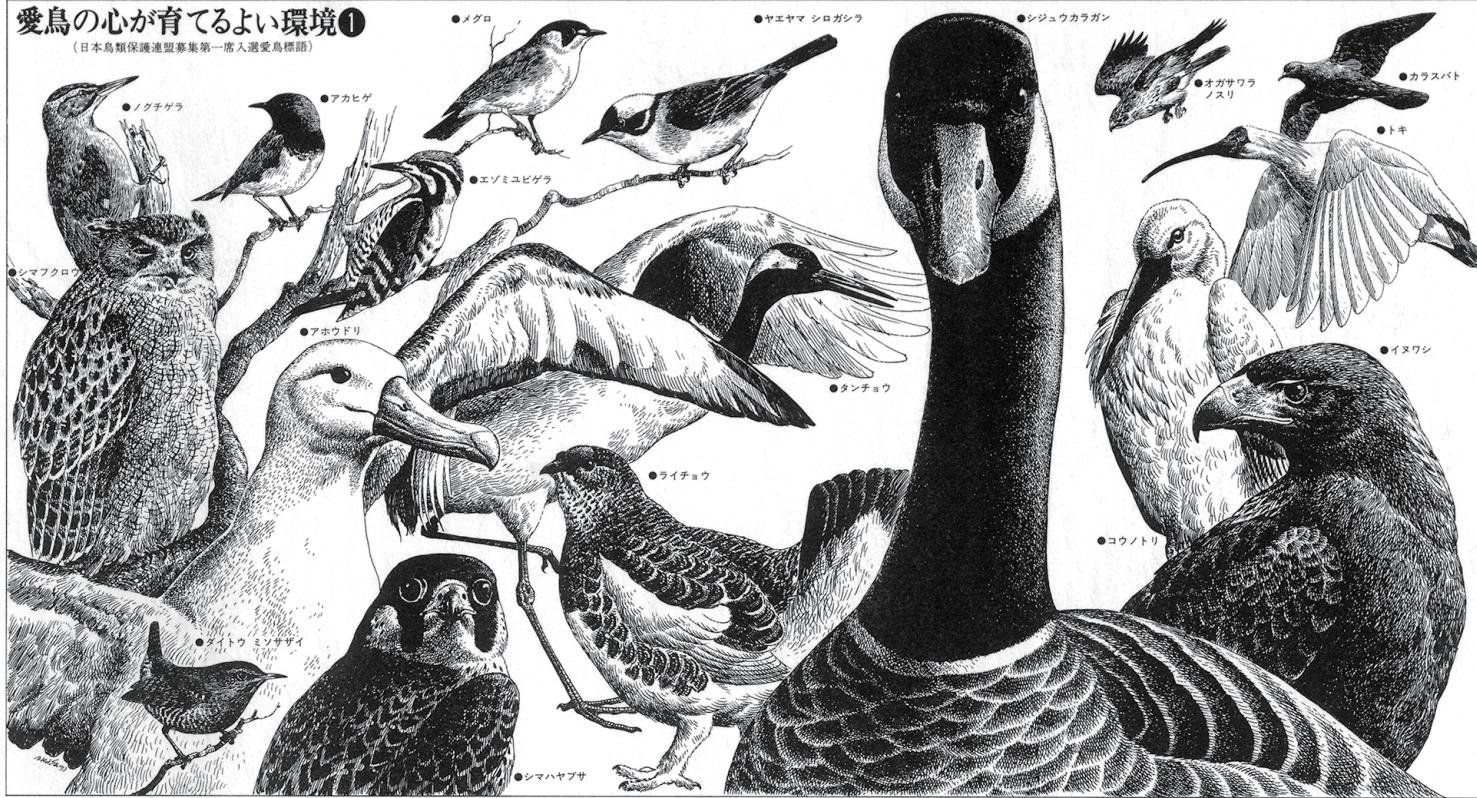


愛鳥の心が育てるよい環境①

(日本鳥類保護連盟募集第一席入選愛鳥標語)



1

いのち トリからヒトへ。生命あるものへ。

まず、ヒトの中に「トリの保護区」を

こう考ふべくも、ヒトが、健康で幸福な生活のやうかる環境をなぐりつけていくためには、ヒトのすむところすべてに、小さきたちが安心していられる

緑の草木、美しい水や空気、静かで清潔な環境が何を置いても必要というになります。都市——かくてそこ

に美しく共存していたはずの自然はおとろえ、ヒトは四季の変化、美しさ、豊かさ、恵みから見はなされ、

は、ヒトの隣人である生命あるものとしてのりたちに、これまであまり無関心だったのではないでしょうか。

私たちは、いまこそ、トリへの問題をヒトの問題としてとらえ直し、とりたちに新しい関心をそそべきだと考

えます。そのことが、すなわち人間自身の生存・生命への自覚と愛情を育むことと考えるからです。今日の自然環境に伴う問題は、産業社会の高度化と急速な経済成長がもたらしたもので、そこだけに困りを求めるよりは、ヒト自身、仲間であるトリや動物や植物の、「生きの尊厳」に思ふをはせる人間らしい心の発達がこそ、もっと深い原因があるよう考ふるのです。

私たちは提唱します。トリへの友愛を喚起し、ヒトとともにそれを守り育よせよ」と。トリの棲む自然——従つて人間の住む自然を守ろうとするだけでなく、この國

にある天然記念物や保護鳥としてのトリたちが、もう、これまで離れてはならないよう、「まず、(私たちは)ヒトの心の中にトリ保護区をもとづく」と提唱します。愛鳥の心が育てるよい環境——このテーマを私たちは愛鳥調

命を犠牲にして、人間に重大な「警鐘」を鳴らしてくれているのです。

なぜトリをヒトの問題として考えるのか

自然の中の、トリたちの美しい声や可憐な姿。それは國土の都市化によって起きているヒトのストレスを解消するだけではなく、精神的肉体の健康をとりもどす意欲を呼びさします。ヒトにとって、トリがいかに大きな意義をもつか。昭和二十五年に初めて愛鳥週間ができるから二十余年。いまここで、あらためて考えてみたいと思います。というのは、トリたちが安全に生活できないうような環境では、ヒトもまた安心したくしかやかないということがわかったからです。

自然環境がこわされる、いろんな生物にさきがけてまつ先にその影響を受けてしまうのです。それがあります。自分のみかの環境えらびの申が広いカラスやドバトなどは、少々の自然破壊にもたえられますが、環境えらびの多いカワセミ、ライチョウなどの種類は、すみかがねられるところが多いなくなっています。

ヒトの目には環境条件のどこかが悪いから、まつ先にその影響を受けてしまうのです。

このように、すみかの環境がこわされるとすぐにいなくなってしまう小さな動物は、その環境がよい状態が悪い状態かの日々にすることができます。さらに言葉をすますいえば、これらのトリたちは、みずから生き命を犠牲にして、人間に重大な「警鐘」を鳴らしてくれているのです。



●この広告は、財團法人日本鳥類保護連盟の指揮を得て、サントリー株式会社が企画・制作し、財團法人日本鳥類保護連盟の監修する形で、サントリー株式会社が行なっている鳥類保護活動の実績を得て、サントリー株式会社